

雑 感

35代 OG 佐藤 慈子

水深を示すデジタル数字が「50」になった。とその瞬間、耳の奥で除夜の鐘のような音が響き、目の前の映像が、ぐにやりと歪んだ。まるで子どものころにテレビで見た「宇宙戦艦大和」のワープのシーンそっくり。窒素酔いだった。

2004年1月。私は熱海の海の中にいた。海中に遺跡らしいものが見つかった、との話を聞いて、取材することになったのだ。

冬の海は身が切られるような冷たさだ。ドライスーツや分厚い手袋、フードを身につけ、ゆっくりと海底に潜行していた。

通常、潜水時に使う空気は、陸上でふだん呼吸しているのと同じ空気、つまり酸素20%、窒素80%の割合のものだ。しかし、水深30メートルを超えて分圧が高くなると、窒素ガスのような不活性ガスは麻酔作用が出て、アルコールに酔ったのと同じ状態になるといわれている。もちろん個人差もあり、症状も様々だ。

今回は水深55m地点まで潜る予定だったので、多少なりとも窒素酔いを覚悟していたが、その時は不意にやってきた。



潜水撮影中の佐藤さん

どうしよう。

みんなは？

不安で呼吸が早くなる。

まずいまずい。

窒素酔いを醒ますには、浅いところに移動すればいいのだが、そうはいかない。自分で自分をコントロールしながら取材を続けるしかない。

窒素酔いがひどい人は、空気を吸うためのレギュレーターを、笑いながら外してしまう人もいるらしい。潜る前に「もしも窒素酔いになったと思ったら、自分で自分の行動を実況中継すればいい。冷静になれるから」と言われたことを思い出した。

——いま水深53mになりました！
——ここで全員、右に曲がります！
——大きな岩が見えてきました！
——サトウヨシコ、深呼吸をします！
——ガイド3人がライトを3つ、つけました！
——ただいま、サトウヨシコはシャッターを押しました！

レギュレーターをくわえたまま、実際に声に出して、言い続けた。いつの間にか、除夜の鐘の音も、歪んだ映像も気にならなくなり、無事、フィルム36枚を撮り終えた(当時は水中デジカメがなかった)。

取材を終え、ゆっくりと浮上開始。少しずつ太陽の光が届きはじめ、明るくなってきた。安堵感に包まれながら、真っ白い世界が脳裏に蘇ってきた。

冬山だ。

探検部時代に登った冬山。吹雪に耐えた日々。まだ見えてこない水面を見上げながら、同時に、吹雪が止んだ翌日の眩しい朝日が見えていた。

3年後。

私はガラパゴス諸島にいた。

小笠原が国内四番目の世界自然遺産の候補になったことで、約1年間、小笠原の取材を続けた。「東洋のガラパゴス」と何度も耳にするうち、本当のガラパゴスとはどんな場所なのか、見てみたいと思った。調べると、1978年に第1号の場所として登録されてから、07年で30年目を迎えることが分かった。

「よし、できる！」

翌日には、取材の趣意書を書いた。記者に(こっそり)声をかけ、取材計画、海外予算計

画など数々の資料を畳み掛けるように提出し、無事、取材できる運びになった。

「野生の王国」「進化の実験場」。さまざまな枕詞で紹介されるガラパゴスは、リゾート地そのものだった。高級レストランや土産屋が立ち並び、ネットカフェがあふれ、タクシーが猛スピードで通り抜けていく。

そんな中で、野生の動物はどのように生きているのだろうか。野生のゾウガメを撮りに行くことになった。

案内されたのは、私有地の牧場。国立公園内は、立ち入りが禁止されているので、私有地しか取材できない。

「トニカク、オクビョウデス。オトヲ、タテナイヨウニ。ストロボ、ダメデス」

昨日の雨のため、ぬかるんでいる泥道をゆっくり進んでいく。と、まだ10歩も進んでいないうちに「イター！」。

茂みをのぞくと、奥に黒光りした鉄カブトのようなものが見える。ゾウガメの甲羅だ。身をかがめると、なんと目が合った。チャンス！

「カシャンカシャンカシャンカシャン！」

し、しまった。ついつい力んでしまい、シャッターを長押しして連写してしまった。と、同時に「フーツ！」と特大級のため息のような音をたてて、ゾウガメは首をひっこめてしまった。

「ダメデスネ」

まあ、すぐにまた会えるだろう、と歩き出した。しかしその後は歩けど歩けど、遭遇しない。甲羅は見つけても、微動だにしないカメラばかりだ。

もう5時間も歩いたらどうか。炎天下の中、持参した水も飲み干した。カメラ機材が肩に食い込んでいる。ガイドはどれぐらい先にい

るんだろ。あの石に座って休みたい。喉がカラカラだ。お腹もすいた。

私はいま、ここで何をしているんだろ。ゾウガメなんか、いるんだろか。いなかったらどうしよう。いなかったことにして戻ろうか。

そのとき、ある声が脳裏をよぎった。

「歩き続けたら着くで」

あれは忘れもしない、夏山合宿。探検部1回生で、初めて臨んだ2週間の縦走だった。雨にうたれ、荷物の重さは倍になり、ガスで真っ白、何も楽しくない。帰りた
い……そう思った私の心の中を見透かすように、先輩が声をかけてきた。

「どんな辛い道も、歩き続けてたら、いずれ終わるからな。ゴールは必ずやってくる」

ああ、そうだった、そうだった。この干からびた虚しい一本道も、永遠に続く訳じゃないんだ。じたばたせず、とにかく進もう。そう思い直して進んでいくと、ガイドの指笛が聞こえた。

ゾウガメが木陰で休んでいた。何家族もいる。

疲れが一気に吹き飛んだ。夢中でシャッターを押す。匍匐全身で近づくと、運良く逃げずにいてくれた。

港に戻る船の中で、水を流し込むように飲んだ。ギョクギョクギョクと喉が鳴る。はっとして、思わず、残りの量を確かめた。手にしているのは、1ガロンタンク。

「そうだ、縦走中じゃなかったんだ。いくら飲んででもいいんだ」。苦笑しながらも、気



森の中にたたく野生のゾウガメ。人の気配を感じたのか、ゆっくりと振り返った

2007年4月11日、ガラパゴス諸島サンタクルス島で

分はすっかり合宿中だった。

探検部を卒業して、もう10年以上になる。が、未だに、探検部の続きをやっているような錯覚に陥ることがある。

映像で蘇ることもあるし、言葉や感覚で蘇ることもある。しかし、探検部時代に過ごした日々は、単なる思い出ではなく、文字通り、私の血となり、肉となっているのは確かだ。

面白いものを、面白いと感じる力。これが当時、私が探検部員だったころ、必要なものだったと思う。だが、卒業してからの方が必要なものなのだ、ということを今、改めて実感している。

この力は持つには努力が必要だ。使わなければ筋肉と一緒にどんどん退化してしまう。ポーっと生きていれば、いくら情報収集しても、ふーんと素通りしてしまう。

その力があれば何かを生み出せる。伝え

られる。分かち合える。そして、それを共有できた仲間は、何ものにも代え難い人生の宝となる。

そんなことを学べたのが探検部時代だった。

一生懸命何かに没頭したり、打ち込んだりすることが、どこか格好悪いこととして見られる世の中となってしまった今、探検部の活動は、なかなか共感してもらえないかもしれない。「サークル何？」と聞かれて「探検部」と言うことに、気恥ずかしさを感じてしまう自分がいるかもしれない。

でも胸を張っていてほしい。探検部で過ごすささやかな日々は、確実にあなたを強くするだろう。感性を豊かにするだろう。そして確実に…。

その先の答えは、卒業後、何年もたったとき、あなたが口にしていることだろう。探検部員だったことを忘れたころに。

(35代OB 朝日新聞勤務)

編集者注：佐藤さんと、同僚記者による作品の写真展「青の世界へ」が全国をまわり開催中です。



モルジブの海で